

第五章 インキの話

一 女工讃詠

さて、万年筆と切っても切れない関係にあるものに万年筆用のインキがある。丸善が普通のインキを製造販売したのは非常に早い時代で、その濫觴は明治十一年一月であり、三十一年二月には、丸善最上インキを売出し、三十九年十二月センチリーインキを、四十三年七月にはゼニスインキをそれぞれ製造発売している。しかし万年筆用は色素が極上の微粒子であったため、自然外国品に太刀打ちすることが出来ず、明治四十四年ごろからウオターマインキを輸入し、これを瓶詰にして、その包装に万年筆用アテナインキの名称を附して発売した。この他米国のカータからも万年筆用インキを輸入したが、その量は極微々たるものであった。しかし第一次世界大戦が始まった大正三年ごろから、輸入が杜絶したので、ようやく国産品製造にふみ切らざるを得なくなった。その結果舶来インキの材料を分析し、四十年來の製造経験にものを云わせ、鋭意研究し遂に丸善アテナインキを完成した。これを一般市場で販売したのは大正六年二月のことであったが、これより先、大体生産の見通しもついたから、販売体勢を整え、工場を整備する必要が起り、大正五年一月の定時株主総会で定款を改正し、營業目的中に文房具製造の一項を追加した。そしてこれに基き、従来小柳津要人の名義で營業して來た本郷区駒込千駄木林町八二番地所在の駒込

工場を、同年一月三十一日から丸善の直接経営に移し、八月に工場法が施行されるのを機会に、社員齋藤豊四郎を工場管理人に任命して全般の責任を負わしめた。

この駒込工場は、今はむかし菊人形で有名だった団子坂を西に登って数十メートル行き、北に折れた所にあったもので、地方から出て来た女工達は、寄宿舎からこゝに通って作業に従事していた。そのころの情況を歌った高村光太郎の詩があるから、お目にかけよう。

丸善工場の女工達

「それでも善い方なのよ

傘貸してくれる工場なんか外に無い事よ」

番傘の相合傘の若い女工の四五人連れ

午後五時の夕立の中を

足つま立つて尻はしよりしをらしく

千駄木の静かな通を帰つてゆく

ああすれちがつた今の女工達

丸善インキ工場の女工達

君達は素直だな

さびしさうで賑やかで

つゝましさうで快活だ

いろんな心配事がありさうで

又いろんな夢で一ぱいさうだ

想像もつかない面白い可笑しい夢でね

有り余る青春に

ばつと花咲いた君達だ

君達自身で悟るには勿体ない程の酣醉だ（略）

丸善の番傘の中に一かたまり

若い小さな女工達は

雨のしぶきに濡れながらいそいそと

道をひろつて帰つてゆく

どうやら通り雨らしい土砂降の雨あし

ふと耳にした女工の言葉に

不思議な世界は展開する

さびしいが又たのしい世界

遠いやうで又近いやうな世界だ（略）

——高村光太郎詩集 伊藤信吉編 新潮社版

この詩が出来たのは恐らく大正九、十年ごろであろうか。第一次世界大戦の結果、都市では成金と称する急造資本家が増え、農村でもまた米価と生糸の値上がりで収入が非常に増加し、富裕な地主は、土地に、各種の事業經營に、株式に投資するものが現われた。しかし戦争による馬鹿げた景気は決して長つづきはしなかった。成金は零落し、投機的な事業に熱狂した地主たちは倒産した。此の間漁夫の利を占めたものは中間農民で、倒産地主から土地を買い自作農となつて堅実な生活をした。しかし地主にも増してはじめなのは所謂零細農であつた。明治末期から累代の政府がとつた米の輸入政策は、米価を下落させ、加うるに朝鮮、台湾に於ける増産計画は、米穀の過剰生産という結果を招いてますます貧農の生活をおびやかした。かれらは家族の口を減すため、娘子を都会に身売りしたり、年期奉公に出すようになった。女工哀史がそろそろ生れだそうとする時期にこの詩が生れたのであろう。

高村はそんな時勢を知っていたから、この女工達の明るさに驚いた。年期奉公のわびしさは、雇傭者が与えるおしきせに満足していなければならなかつた。そんな時「傘貸してくれる工場なんか外に無い事よ」は女工達たちの実感であつた。丸善が徒弟制度の時代から守つて来た親子の關係は、労資対立の萌芽を見せ出したその当時であつてさえ、尚且つ堅持されていたのだから、これは高村にとって驚きであつたにちがいない。そこでいづれは心配ご



駒込工場の作業場

とがあるにせよ、それを吹き飛ばす底抜けに明るい姿に、青春の夢を感じたにちがいないまい。

女工達が概ね従事した作業は、インキを瓶につめ込んだり、瓶を包装したりする簡単なものであったが、インキそのものの製造も左程手がこんだものではなかった。ただ大量生産をするために、ボイラーや電動機を使用するにとどまった。しかし第一次世界大戦が勃発して外国製インキの輸入が杜絶した上、国内の需要が日増しに増加し、更にアテナインキの類似品が市場に出廻って販売価格を維持することが困難になったので、アテナインキよりもやゝ品質を落したオリオンインキを製造販売するため、従来の設備を改造拡張する必要に迫られた。そして初めは西洋竈にいくつもの釜をかけ、染料その他の原料を容れた真鍮罐を釜の中に入れ、湯煎して溶解したものであったが、オリオンインキを売り出した大正七年から、気圧のないボイラー所謂温水罐で湯をわかし、その湯を

ひいて染料その他の原料を溶解し、更にインキを濾過溜桶から瓶に注入するため、十二石（約二・一六kl）入の二つの桶に移すのであるが、此の時に電動機を利用して生産量を高めた。その結果翌八年には生産量が二倍になり、爾來八年間に五倍以上を生産する好成績を示すにいたった。このように製造高が急激に増大したため、万年筆用と筆記用インキの製造工場を分離することになり、大正十一年末、東京府北豊島郡日暮里町大字金杉七七七に、丸善日暮里分工場を新築することを決定し、翌十二年竣工後いくばくも経ない三月二十六日から操業を開始した。かくて駒込工場の管理人である斎藤豊四郎をして分工場の管理人を兼務せしめ、主として筆記用インキと墨汁の製造に当らせた。

ついでながら墨汁の製造について一言つけ加えておくと、大正五年二月に東京府北豊島郡巢鴨村巢鴨新田七四五所在の松花園製墨所を買収して丸善墨汁製造にのり出したのが始まりで、その後苦心改良の結果、おいおい市場価値が高まり、遂に日暮里分工場に製造一切を移し量産にふみ切った。

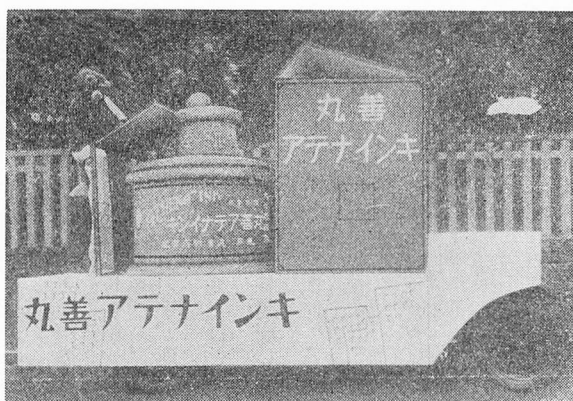
二 丸善インキの名声

かくて丸善インキの名声は日と共に高まり挿図の如く明治二十三年と大正三年間に二〇数個の賞牌を獲得した。しかし乍らこれを以って安閑としているわけにはいかなかった。と云うのはアテナインキの名声を倣って類似品を販売するものがあり、同業者が輩出して売込み戦に懸命であったし、取わけ昭和初期の不況には、物凄い競争が始まりかけていた。そのためインキの製造販売だけに依存していなかった丸善でも、宣伝広告を疎そかにするわけ

キニイ善丸るあ譽名

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 第三回内國勸業博覽會優狀受領 | 第五回内國勸業博覽會優狀受領 |
| 凱旋紀念五二共進會銅牌受領 | 凱旋紀念内國製造品博覽會金牌受領 |
| 内國商工品共進會金牌受領 | 第四回五二共進會金牌受領 |
| 神戶京城博覽會金牌受領 | 東京勸業博覽會銀牌受領 |
| 第五回製造品博覽會金牌受領 | 第二回内國製造品博覽會名譽金牌受領 |
| 陶器製品共進會名譽金牌受領 | 第六回全國製造品博覽會金牌受領 |
| 第三回内國製造博覽會名譽金牌受領 | 第二回全國特產品博覽會金牌受領 |
| 名古屋博覽三百年紀念共進會進步金牌受領 | 第七回全國製造品博覽會金牌受領 |
| 第十一回貿易品博覽會銅牌受領 | 第二回内國製造品博覽會名譽大賞受領 |
| 第一回日本文具教育品博覽會名譽金牌受領 | 神戶勸業博覽會進步金牌受領 |
| 第二回東京勸業博覽會金牌受領 | 第三回東京勸業博覽會金牌受領 |
| 富山縣聯合共進會銅牌受領 | 東京大正博覽會金牌受領 |

受領の賞牌



東都広告祭参加の装飾自動車

にいなかった。たまたま昭和六年天長節の祝日を期して東都広告祭が催されたが、丸善はその行列に、アテナインキ、アテナ万年筆、バレー自働研安全剃刀の広告装飾自動車を各一台ずつ仕立てて参加させた。「アテナニウス」第四号（昭和六年七月五日発行）には、当日の模様を詳細に記している。それによると、その日は朝から小雨が降りつづいて祭典行事執行が危ぶまれたが、兎に角雨中行進することに決り、式典後の午後一時、装飾自動車

九〇余台、同荷車六〇余台、仮装人員一、一五〇余名の大行列は芝公園を出発し、昭和通を経由して上野公園に行き、そこで散会した。この中で丸善の装備車は、実物模形に重点を置き、アテナインキの車にはその包装函で運転台を囲み、泥絵具で上の蓋が少し開きかかっているように書き割をした。この箱の後に栓をとったインキ瓶をおき、横腹に出入口をつくり扉を取りつけ、またインキ瓶の更に後方に斜面を見せた簡単なテーブルをおき、丸善インキの土瓶を椅子になぞらえ、その上に仮装した人間が腰をかけて色々滑稽な仕草を演じた。例えば、インキ瓶の口から紺青の風船が出てくると、それをしおにインキを付けるような仕草でペンを出す。と、ペン先が風船を破る。パンと威勢のいゝ音がする。沿道の見物人が驚き、改めて装飾を見直す——といった風に。自動車の腰廻りは、木製布張の枠でこれを覆い、その上に高層ビルの図案を書き割

りにした。

アテナ万年筆の方は、万年筆の模型を耳に挟んだ滑稽な人物が活動するというのが主な趣向で、自動車の運転台一杯に、朱赤の角形ポストをスッポリかぶせ、それに「丸善アテナ万年筆 奉祝天長節」と大きく書き入れ、人物はベニヤ板でつくったものを、運転台の中に装置した梃子を前後に動かして、上ったり下ったりするように仕掛けられた。また後部にはペン先だけを鉄板でつくって取りつけ、その下の腰廻りにペン軸の上部を書き割りにしたから、後から見ると、この二本が連続して一本の万年筆のようであった。こうした奇抜な工夫は見物人をして『丸善』の二字を印象づけるに充分であり、更に丸善の名声を高めた。